

CONCERTINO

No 4

di KYOTO

1962年11月17日(土)午後7時

京都会館第2ホールにて



演奏会に寄せて

経ってみれば早いようにも思えますが、四年の才月というものは一つの仕事の基礎づくりに取り組んだ人々にとっては、一方ならぬ苦勞の連続であったと思います。この弦楽団をここまで育てられた諸先生方の努力と、生徒諸君の熱心さに心から敬意を表したいと存じます。

世の中には、いわゆる玄人の持つ一種の臭味を嫌い、素人のもつ一途な純真さを尊ぶ人が大勢おります。この弦楽団も、技術的には専門家にも劣らぬ程でなければならぬが、精神的にはどこまでも純真であって欲しいと思います。

今夕、第四回定期演奏会が行われることは誠に嬉しく、きっと大きな進歩のあとを、心ゆくまで聞かせて頂けることでしょう。そして、今後さらにすぐれた弦楽団に成長することを心から期待しています。

京都市長

高山義三

主催 才能教育研究会京都支部

後援 京都市・京都市教育委員会

“CONCERTINO di KYOTO”

について

才能教育研究会京都支部では、合奏をする事によって子供により深い音楽の理解と、そして互いの協力の精神を養うため、33年の秋に合奏科を設け、本格的な弦楽合奏の訓練を始めました。音楽の勉強は発表によって、時々外部より批評を受ける事が大切なために、毎年11月にリサイタルを行う事として、以来毎週土曜日の夜2時間の練習を続け、34年の11月に祇園会館において第1回のリサイタルを行うに至りました。当時のメンバーは小学校4年生から中学2年生までの小さな子供達でしたので、「京都の子供の合奏団」「京都の小さな合奏団」という意味から、コンチェルティーノ・ディ・キョウト (Concertino di Kyoto) と云う名前をつけました。高山市長は、私達の意図を大変喜ばれ、市と市教育委員会の後援を約束して下さいましたので、私達も心強く日夜訓練に励み、演奏会では、子供としては大変に立派であると云う御批評を戴くことが出来ました。この様に皆様方の暖かい愛情のもとに発足した。私達弦楽団は、第2回、第3回のリサイタルもどうやら好評のうちに行い、今年は第4回目となりました。4年たった私達は年令も今は中学1年生から高校3年生までとなりましたので、高校や大学の受験の準備に追われて、毎週土曜日の練習も時には休まなくてはならないと云う状態ですが、この一年間出来るだけの努力をしたつもりです。又、年令的にも大きくなった私達は、そろそろ「子供の弦楽団」から、「大人の弦楽団」への脱皮も考えなくてはなりません。この様にいろいろと問題を持った第4回リサイタルは、これに対する皆様方の卒直な御批評が今後の私達の方針への大きな参考になると思います。私達は、この弦楽団の大ファンであった前京響指揮者のカールチェリウス先生の御忠告によって、本当の音楽の生立ちを知るために、ビバルディ、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルトのみを勉強して来ましたが、でも今年は、これにグリーグを加えてみました。これがどんな結果に終るか、これも音楽を勉強している私達には大きな興味の一つです。私達は、プロとか、アマチュアとか云う事は考えておりません。ただ才能教育の教えの一つである「音楽によって情操を高め、音楽によって地上に美しく、より高い人間社会をつくる」と云う目的に向かって努力しているのみです。私達は、私達の演奏を皆様方に聴いて戴き、私達の目的を知って戴く事によって、増々皆様方と結びつき、より善き市民として、人間として育ちたいと考えております。

この様な私達の目的に対して、一層の御批評と御支援を重ねてお願い致します。



ごあいさつ

指揮者 井手章夫

時折、十七世紀頃の人々の生活を想像して見る事があります、物質文明の発達していないその頃は、自然の力の前には人間はほとんど無力で、或る時には日照りに雨を求め、或る時は洪水に作物をうばわれて茫然とする事も多かったでしょう。乏しい医学の前に疫病は猛いを振り、一夜にして肉身、友人を失って人生のはかなさを、しみじみ感じた事でしょう。人々は自然を畏れ、田園の収穫と共に、毎日の健康を、敬けんな心で神に祈った事と思います。

現代に住む我々は、科学の発達と共に物質的には本当に恵まれています。しかし、朝一度家を出ると、もう自分の力ではどうにも出来ない大きな歯車の力のままに動き流されて、一日をただ疲労のままに過してしまっているのにハッと気付く事があります。機械文明の中に息がつかまる感のする事さえあります。

バロック音楽には、昔の人の人間らしい素朴な息吹きと、つつましい祈りの心が生き生きと感ぜられます。近頃バロックの音楽を楽しむ人がふえて来たと言われますが、これは単なるリバイバル・ブームとかと言うような浅薄なブームの類でなくて、現代人の郷愁がどこにあるかを考えさせられて、宗教家でも何でも無い私に興味深い問題と感ぜさせられます。

曲 目

1. シンフォニア 1番 ハ長調
 アレグロ
 アンダンテ
 プレスト (アレグロ) ビバルディ
2. 合奏協奏曲 作品6の2 ヘ長調
 アンダンテ・ラルゲット
 アレグロ
 ラルゴ・ラルゲットアンダンテ
 アレグロ・マ・ノン・トロppo ヘンデル
3. ラ・フォルリア
 コレルリ---ジェミニアーニ
4. 組曲「ホルベルクの時代より」 作品40
 プレリユード
 (アレグロ・ビバーチェ)
 サラバンド
 (アンダンテ)
 ガボット---ミュゼット---ガボット
 (アレグレット・ポコ・ピュウ・モッソ)
 アリア
 (アンダンテ・レリジオーソ)
 リゴードン
 (アレグロ・コン・ブリオ) グリーク
5. 調和の幻想 作品3の4 ホ短調
 アンダンテ
 アレグロ・アッサイ
 アダージョ
 アレグロ ビバルディ

Programma

1. Sinfonia Nr. 1 Do maggiore
 Allegro
 Andante
 Presto (Allegro) A. Vivaldi
2. Concert Grosso op. 6 Nr. 2 Fa maggiore
 Andante Larghetto
 Allegro
 Largo Larghetto Andante
 Allegro, ma non troppo G. F. Händel
3. La Follia
 Corelli-Geminiani
4. Suite 「Aus Holberg's Zeit」 Op. 40
 Praelude
 (Allegro vivace)
 Sarabande
 (Andante)
 Gavotte-Musette Gavotte
 (Allegretto poco piu mosso)
 Air
 (Andante religioso)
 Rigaubon
 (Allegro con brio) E. Grieg
5. L'Estro Armonico Op. 3 Nr. 4 mi mineur
 Andante
 Allegroassai
 Adagio
 Allegro A. Vivaldi



指揮 井手章夫 指導 新井 覚 (バイオリン)
野村武二 (セロ)

第一 バイオリン

東田 涉 中村 剋之
大森 美子 今井 玲子
小谷 明司

第二 バイオリン

角野 民子 勝馬 春美
小谷 明正 仲佐 悦子
木内 真人

ビオラ

新井 覚 園原 珠美
中村 信雄

チェロ

武藤 俊介 米原 徹
野村武二

コントラバス

森田 昭

ピアノ

椿 園子

1. シンフォニア ハ長調 アントニオ・ビバルディ

数多くの器楽曲を書いたビバルディは、シンフォニアも沢山書いているが、はっきりした数は不明である。シンフォニアと云うのは器楽合奏曲につけられた名称であり、オペラの序奏、カンタータ等の導入曲、器楽合奏用組曲の冒頭楽曲等に用いられたりして一定の形式を持たなかったのが、1690年頃から急・緩・急の3部分を持ちながら全曲を中断せずに進む小楽曲をシンフォニアと呼ぶ様になった。作品ハ長調の冒頭アレグロは、時折現れるユニゾンをはさんで、低音楽器がきざむリズムに乗って第1・第2バイオリンが力強く、整然と動き、第2の部分アンダンテは、これも低音楽器の断続的和弦に乗って第1第2バイオリンが、美しく哀切なメロディを歌い、第3のプレストは、楽器が拍子のリズムに乗って快活に躍動するが、全曲にわたって、メロディは非常に単純である。

2. 合奏協奏曲 作品6の2

ジョージ・フレデリック・ヘンデル

ヘンデルの音楽は、バッハの壮厳さに対し、やわらかく慈愛のこもったものを感じさせる。この合奏協奏曲作品6の2は、作品6の1と共に1739年の作で、二つのバイオリン及びセロの独奏と合奏からなっている。第1楽章アンダンテラルゲットは、ハ長調でやわらかく、のびやかな田園風景を思わせる。第2楽章アレグロは短調で、独奏楽器の対話と合奏とが、非常にリズムカルに展開する。第3楽章ラルエは、変ロ長調で、力強い附点音符の進行と、次に現われるラルゲットの流れる様な美しさの対比が面白く、第4楽章アレグロ・マ・ノン・トロポは再びハ長調にもどり、フーガの形で力強く始まる中に時折、緩やかな美しい旋律を歌わせるのは、ヘンデルのやさしい人間性を感じさせる。

3. ラ・フォリア アルカンジェロ・コレルリ
フランチェスコ・ジェミニアーニ
(1653~1713—1687~1762)

コレルリはローマ派と呼ばれるバイオリン奏法を完成した一人であり、ビバルディと並んでバロック時代の偉大な奏者、作曲家である。華美で困難な技術を用いず、豊かな音で旋律を美しく歌うよう意図されたコレルリの奏法で、作品も多く、又教育者としても著名なバイオリニストを多数育てている。その中の一人であるジェミニアーニが

のバイオリンソナタ「ラ・フォリア」を主題にしてコンチェルト・グロッツ形式に編曲したものが今夜演奏されるものである。ポルトガルに16世紀始めに発生し、スペインに伝って流行したこの舞曲は騒々しい踊りであったためにフォリア（イタリー語で狂気と云う意）と名付けられた後、17世紀ごろよりフォリアは軽快な舞曲に変わったものとされている。

曲は独奏バイオリン1本と弦楽合奏で第一バイオリン1、ピオラ1、セロ1、の4人でコンチェルティーノの形を作ることもあり変化に豊んでおり、始めにゆっくり奏される主題が23の変奏曲となって続き、総合奏となり壮大な終りなる。

4. 組曲「ホルベルグの時代より」 エドワード・グリーク
(1843~1907)

1884年に、近代北欧文学の祖として「北欧のモリエール」と呼ばれる文豪ルードウィヒ・ホルベルグの生誕200年祭が行われた。この祭典のために依頼されてグリークが作ったこの曲は、18世紀の組曲の形式を用い、古い舞曲を中心に構成されている。はじめ弦楽合奏のために書かれたが、後に彼自身ピアノ独奏用にも編曲している。活潑なリズムに支配される三部形式の前奏曲にはじまり、ゆるやかな旋律に北欧色をたたえたサラバンドがこれにつづく。ガボットの中間部には5度の持続低音をもつミュゼットが用いられている。アリアは美しい息の長い旋律がバイオリンと低音部の間に引きつがれる。最後のリゴードンではピチカート伴奏の上にバイオリンとピオラの独奏が活躍する。

5. 調和の幻想 第4番 アントニオ・ビバルディ

「調和せる詩」とか「調和の幻想」とか訳されている12曲をセットとした作品3の内から、今回は第4番ハ短調が演奏される。この作品3の4は、4つの独奏バイオリンと弦楽合奏のために書かれており、教会ソナタの形式をとっている。

第1楽章アンダンテは、のびやかな総奏の間を独奏が美しく歌い、第2楽章アレグロアッサイは全楽器が非常に活潑に動きまわる。

さて、次は、非常に短いアダージョの部分と次のアレグロの部分と、に分れているが、前者を第3楽章、後者を第4楽章と考えるより、第3・第4楽章が圧縮されたもので、短かく緩やかな導入部から34拍子の舞曲に入っていくと云うみかたをすべきで、これが基本的な教会ソナタの形式である。

Hino
高性能の日野

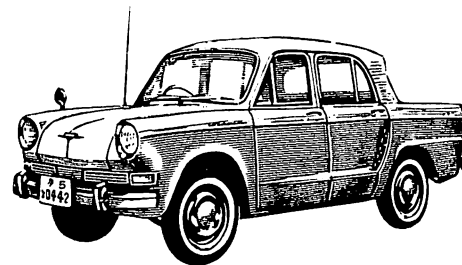
コンテッサ

貴方のファミリーカー
として御愛用下さい

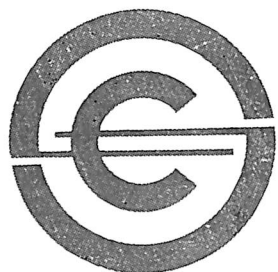
お問合せは

京都日野モーター株式会社

京都市南区吉祥院石原堂ノ後西町5



TEL (39) 9001~3・4039・3609



中央レース株式会社

京都市右京区山ノ内苗町八番地

電話 京都 (81) 3161~7

ダイハツ

ミゼット

ハイゼット

デラックス ライトバン

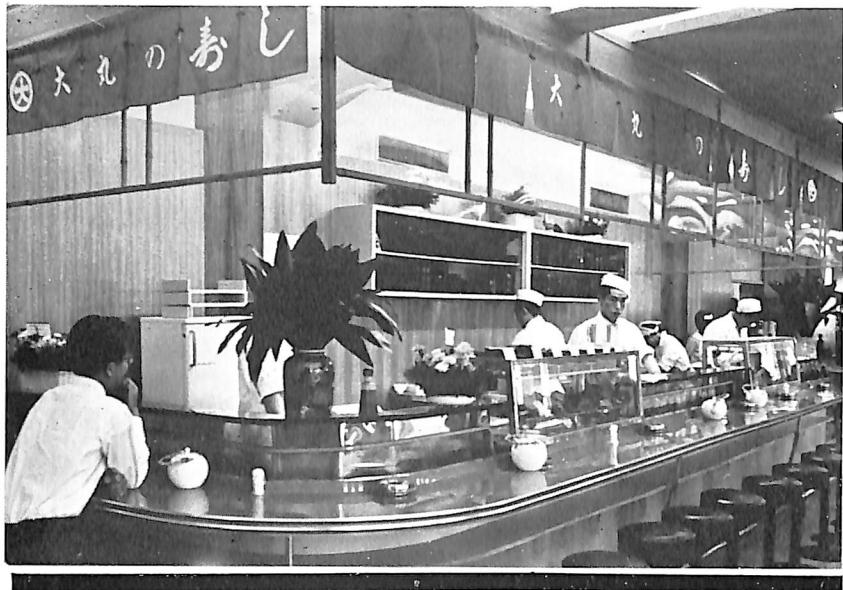
三輪自動車

小型四輪トラック

大阪ダイハツ販売株式会社京都支店

京都市下京区堀川通五条下ル柿本町580ノ4

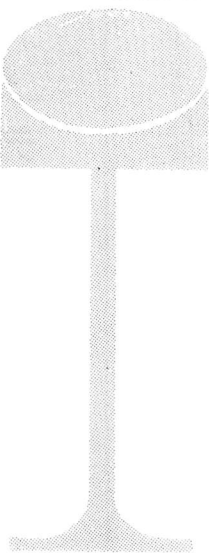
電話 (35) 9131~4 社内電話 (35) 4864



京都・四条

大丸

電・大代表 8111



新設!!

七階食堂にお目見えしました
お買物の合い間の喫茶やお食
事にぜひご利用下さいませ

おすすめカウンター
サンドイッチバー
ソフトクリームバー

新しいセンスの
良い品を……



お買物は
まるぶつへ



■車でのお買物に便利なモータープール▼西裏

バックグラウンドミュージックが
あなたのお買物を楽しくご案内



丸物

京都駅前
電代 072151・2161

